

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)
大学院学生研究
2023年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学研究科	教育学専攻
研究代表者 (2024年3月現在 のものを記入)	在籍課程・学年		氏名
	<input type="checkbox"/> 博士前期課程 年 <input checked="" type="checkbox"/> 博士後期課程 1年		北村 桜
指導教員	所属部局・職名		氏名
	文学部・教授		渡辺 哲男
自然・人文・社会の別	自然 ・ <input type="radio"/> 人文 <input checked="" type="radio"/> ・ 社会	個人・共同の別	<input type="radio"/> 個人 <input checked="" type="radio"/> 共同 名
研究課題	玉川学園と松本千代栄の舞踊教育からみる日本の体育科領域「ダンス」の 史的研究		
研究組織 (研究代表者 ・共同研究者) ※2024年3月現在 のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年		氏名
	文学研究科教育学専攻 博士課程後期課程1年		北村 桜
研究期間	2023 年度		
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 200,000円 / (採択金額) 200,000円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究の目的は、近代日本の学校体育に位置づけられたダンス教育の内実を歴史的
的文脈から明らかにすることである。とりわけ遊戯からダンスへの転換に着目し、
教育的意義をもつ遊戯の一項目としてダンスが取り入れられた経緯に着目する。

従来の研究では、近代日本の体操科が男子の兵式体操の代わりとして女子の運動
法に「行進遊戯」を導入したことが報告されている。そこで、近代日本の学校体育
において体操と対峙した遊戯の中に舞踏的遊戯が位置づけられたことに着目し、体
育科の一項目として教育的価値をもつとされたダンスのありようを明らかにする。
この研究は、日本のダンス教育の変遷だけでなく、体操と遊戯の対立や統合によっ
て立ち現れた日本の体育理念を解明する手立てとなる。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ ダンス } { 遊戯 } { 体育 }

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)**1. 本研究の課題**

従来のダンス研究では、学校体育におけるダンスは1947年「学校体育指導要綱」によって遊戯からダンスへと転換したことが明らかとなっている。戦前の遊戯は、唱歌教材に振り付けた既成作品を子どもに教授する学習内容であった。一方で、戦後の体育科におけるダンスは、子ども自身が創作する学習内容へと一新されたのである。

このような研究動向の中で、既成作品を子どもに与えることと、子ども自身の表現を引き出すことの2軸のダンス教育は、長い年月をかけて入り混じってきたことが志向されつつある。寺山由美は、明治期から昭和初期に焦点を当て、子ども自身の表現を重視するダンス教育の萌芽が1920年代から存在していたことを明らかにする[cf. 寺山 2010]。

しかし、学校体育のダンスは、元来ダンスを踊る目的をもって取り入れられたというよりも、遊戯の一教材として出現していることに注目しなければならない。というのも、学校体育におけるダンス教育が「遊戯」の一項目として顕れている以上、「遊戯」の価値を保障するための一教材であったと考える必要があるからである。そのため、本研究では、ダンス作品を子どもに与えることから、子どもの表現を引き出すという枠組みの前提として、学校体育の遊戯の中に設定されたダンスの理論的背景を検討する。

2. 本研究の目的

本研究の目的は主に2つある。

第一に、体育科におけるダンスの導入過程を、松本千代栄(1920 - 2022)による奈良女子高等師範学校の実践によって解明し、日本の学校体育における創作重視のダンス教育の確立を明らかにすることである。日本の学校体育に創作重視のダンス教育が受容された経緯を、奈良女子高等師範学校附属小学校の木下竹次によるドルトンプランの導入の影響から考察することで、創作重視のダンス教育の理論的背景および実践内容を解き明かす。

第二に、戦後の体育科のダンスの前身として、戦前の学校体育における遊戯の内実を明らかにすることである。教育制度の中に遊戯という名称がどのように出現したのかを詳らかにし、教育制度の変遷とともに、遊戯の内容がなぜダンス教育を担うようになったのかについて検討する。学校体育におけるダンスがなぜ遊戯とイコールで結ばれているのかを検討することで、近代日本の学校体育におけるダンス教育の独自性を示したい。

3. 本研究の方法

- (1) 松本千代栄による創作重視のダンス実践を、奈良女子高等師範附属小学校学習研究会編『学習研究』の論考から検討する。
- (2) 1900年代における学校体育に位置づいた舞踏的遊戯の教育的価値について、1904年に発足した文部省管轄・体操遊戯取調委員による運動遊戯の論考を中心として検討する。

4. 研究成果**(1) 発表 「小学校体育科「表現運動系」における「ダンス」導入の経緯に関する史的検討」**

本発表では、小学校体育科「表現運動系」におけるダンスを歴史的な文脈から捉え直すために、1947年「学校体育指導要綱」において松本千代栄(1920 - 2022)が導入した創作重視のダンス教育に着目し、教師が子どもの表現を引き出すために与える要素がいかなるものであったのかを検討した。

戦前のダンス教育は、唱歌遊戯などの既成作品を子どもに与える内容であったことから、単なる教え込みとして批判された。ゆえに、戦後の体育科におけるダンスは、既成作品の教え込みの問題を乗り越えるために、子ども自身がダンス作品を創作する内容へと転換したのであった。子どもの創作は個人の経験によって成立するものであるべきとし、既成作品を教えることはあくまでも創作の手がかりを与える程度でなければならない。

だが、松本は教師による助言を全て排除しようとしたわけではなく、むしろ子どもがイメージを動きとして表現する方法を、教師から子どもに与えるものとして設定する。結論として、戦後のダンス教育は既成作品の模倣に偏ることを避けながらも、動きのイメージやテーマを与えることで子どもの表現を引き出そうとしたのである。

研究成果の概要 (つづき)**(2) 発表** 「教育政策からみた学校体育におけるダンス導入の経緯」

本発表では、教育的価値をもつ遊戯が設定される理論的背景を明らかにするために、1900年代の近代日本の学校体育における運動遊戯の内実を検討した。具体的には、1906年に『官報』に掲載された体操遊戯取調委員による「普通教育ニ於ケル体操遊戯取調報告」において、舞踏的遊戯の導入が推奨された点に着目し、その背景にある理論を詳らかにすることで、学校教育に相応しい遊戯と日常的な遊びとが分かたれる経緯を考察した。

体操遊戯取調委員が体操科に位置づけた「運動遊戯」は、従来の体操に代わった随意による「自由」「快活」を目的とした運動であることが明らかとなった。舞踏的遊戯ないしダンスは主に方舞が正課科目として奨励され、女子の体操に代わる運動、また調和の精神を養うものとして教育政策に位置づいたのである。その一方で、学校において禁止すべき遊戯がはっきりと記述され、遊戯が「卑劣軽率」に流れることを危惧している。本発表では禁止すべき遊戯の中から円舞を検討したが、容儀動作からは「卑劣軽率」な側面が明確には浮かび上がってこなかった。

(3) 論文 「学校体育へのダンス導入の理論的背景」

本稿では、1904年に発足した体操遊戯取調委員による共同著作『体育之理論及実際』[1906]を手がかりに、体操科の一項目として設定された「運動遊戯」の内容を検討し、学校体育に位置づいた舞踏的遊戯ないしダンスの特徴を明らかにした。その際、委員の一人であり「運動遊戯」について記述した心理学者・高島平三郎(1865 - 1946)の遊戯観を参照し、舞踏的遊戯が坐位の習慣から解放すること、また審美的情緒を養うことを目的とした部分に注目した。

運動遊戯は児童の「自治心ノ発達」を促すという点では評価されるものの、学校や家庭において相応しくない類のものは忌避されたのであった。本報告が注目した円舞は「不健全ナル思想」を誘発するものの一例として位置づけられている。だが、全ての舞踏的遊戯が禁止の対象となったのではなく、方舞は「行進遊戯」として学校に課すべきだとされる。体操は個人が別々になって運動するものであるなら、舞踏的遊戯は皆が協同するものであり、そうした活動によって審美心が養えることに価値が置かれたのであった。

(4) 論文 「松本千代栄による体育科「ダンス」の導入に関する史的検討」(現在査読中)

本論文では、松本千代栄(1920 - 2022)のダンス観を明らかにするための一端として、戦前の学校体育における遊戯と1947年「学校体育指導要綱」に導入された創作重視のダンスを比較し、子どもの表現を引き出すためのダンス教育の様相を歴史的な脈から捉え直した。戦前から戦後の学校体育におけるダンス教育の転換には、子どもの創作の可能性を志向した点でつながりがあったことを示した。戦前の唱歌遊戯を与えるダンス教育は、一見すると創作重視のダンス教育と対立するように思われる。

しかし、戦前の唱歌遊戯を提唱した戸倉ハル(1896 - 1968)のダンス観は、教師を模倣することを学びの始まりとしながらも、子ども自身の興味に即した創作への伸展が目指される。戦後のダンス教育は、こうした戦前に萌芽していた創作への志向を引き受けつつ、創作の担い手を子どもに転換したのである。たしかに、松本は単に既成作品を教えることは避けた。だが、創作のきっかけであるイメージやテーマを教師が与えることによって子どもの表現を引き出そうとしたのである。

5. 参考文献

- 井口あくり・可兒徳・川瀬元九郎・高島平三郎・坪井玄道『体育之理論及実際』国光社、1906年。
印刷局『官報』第6760号附録、印刷局、1906年1月15日、1-8頁(「○普通教育ニ於ケル体操遊戯取調報告」)。
寺山由美「創作を主とする舞踊教育の生成過程——「与える」から「引き出す」授業への萌芽——」舞踊研究会『舞踊教育学研究』第12号、2010年、5-18頁。
名須川知子『唱歌遊戯作品における身体表現の変遷』風間書房、2004年。
松本千代栄「ダンスの指導記録：(六年)」奈良女子高等師範学校附属小学校学習研究会『学習研究』第22号、1949年、31-35頁。
松本千代栄『舞踊教育——松本千代栄教授退官記念集——』松本千代栄教授退官記念集週刊委員会：東京、1985年。

※この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて研究成果報告書提出フォームより提出してください(紙媒体等、研究成果報告書提出フォームから提出できない場合は、別途リサーチ・イニシアティブセンターへ提出してください)。

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

※修士論文・博士論文は含みません。

①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)

[査読論文] 北村桜、「学校体育へのダンス導入の理論的背景——1904 (明治 37) 年の体操遊戯取調委員が定めた「運動遊戯」に着目して——」『立教大学教育学科研究年報』第 67 号、2024 年、187 - 203 頁。

②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)

該当なし

③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)

該当なし

④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

[学会発表] 北村桜、「小学校体育科「表現運動系」における「ダンス」導入の経緯に関する史的検討——戸倉ハルと松本千代栄のダンス観を中心として——」、舞踊学会、第 26 回定例研究会 (例会)、6 月 10 日。

[コロキウム発表] 北村桜、日向悠太、井谷信彦、菊地虹、「教育政策からみた学校体育におけるダンス導入の経緯——1904 (明治 37) 年の体操遊戯取調委員が定めた「運動遊戯」を中心として——」、コロキウム 5「教育実践をめぐる「遊び」概念の検討——教育実践における造形遊び・体育科ダンス・ビデオゲームの思想に触れる——」、教育思想史学会、同志社大学第 33 回大会、同志社大学、2023 年 9 月 16 日 - 17 日。